1

キリスト教神学
第1章　神学とは何か

一宮基督教研究所
安黒務

2

「キリスト教神学」
概略

1

1. 神を研究すること
2. 神を知ること
3. 神はどのような方か
4. 神は何をなされるか
5. 人間
6. 罪

2

7. キリストの人格
8. キリストのみわざ
9. 聖霊
10. 救い
11. 教会
12. 終末

3

第1部　神を研究すること
概略

1. 神学とは何か
2. 神学と哲学
3. 神学の方法
4. 神学と聖書の批評的研究
5. キリスト教のメッセージの今日化
6. 神学とその言語
7. ポストモダンと神学

4

第1章　神学とは何か
概略

1. 宗教の本質
2. 神学の定義
3. 神学の組織図における組織神学の位置づけ
    1. 組織神学と聖書神学
    2. 組織神学と歴史神学
    3. 組織神学と哲学的神学
4. 神学の必要性
5. 神学の出発点
6. 学としての神学
7. なぜ聖書なのか

5

序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

6

第1節　宗教の本質

1. 人間－癒しがたいほどに宗教的な存在
2. 定義できる者がほとんどいない事柄
3. 共通した特徴
   1. 世界観･人生観
   2. 信条･教義
   3. 世界観としての性格付け
4. 宗教の位置づけに変化
   - カントの著作への反動
5. 宗教をどのように捉えるべきか？
   - 指導者の名のもとにある構成員
6. キリスト者であるとは何を意味している？
   - 信仰箇条、諸経験、社会的次元
7. 神学の宗教に対する関係
   1. 神学に関する他の違った概念
   2. 宗教を主観的なものとみる見解
   3. 文化的言語的見解
   4. 教理－神についての真の知識、宗教－知情意の全人格を含むもの

7

第2節　神学の定義

1. 神についての研究、あるいは学
2. より完全な定義
   1. 聖書的
   2. 組織的
   3. 文化と学問で扱われている諸問題
   4. 今日的
      - 直面する問題やチャレンジについて語る
   5. 実際的

8

第3節　神学の組織図における組織神学の位置づけ

1. 広範囲に使われている用語
2. 組織神学と聖書神学
   1. 聖書神学と呼ばれる〝運動〟
   2. 聖書の神学的内容
      1. 純粋に記述的なアプローチ
      2. 「真の」聖書神学
   3. 聖書的な神学
3. 組織神学と歴史神学
   1. 共時的アプローチ
   2. 通時的アプローチ
   3. 「先入観」「前理解」というフィルター
   4. 時代のイデオロギーをどう用いるべきか
   5. 思想や主張について評価する手段を得る
4. 組織神学と哲学的神学
   - 哲学の神学への貢献
     1. 内容を提供
     2. 弁護、あるいは確証
     3. 概念や議論を吟味精査

9

第4節　神学の必要性

- イエスを愛しているなら十分ではないのか？
1. 信仰者と神との関係…正しい教理的信条が不可欠
   1. キリストの神性
   2. キリストの人性
   3. キリストの復活
2. 真理と経験は相互に関係
3. 宗教と信仰を脅かすさまざまな批判
   - 銀行員が偽札を見分ける技術

10

第5節　神学の出発点

1. どこから始めるべきか…神論か聖書論か
2. ストロングの『組織神学』
3. トマス･アクィナス「五重の証明」
4. 合理的アプローチと経験的アプローチの展開
5. アプローチにおけるいくつかの問題
6. 確証された神はどの神なのか？

7. 聖書から始めること
8. 神についての先行概念なしに啓示は
9. 聖書はなぜ啓示なのか
10. 両方から始めること
11. 神と神の自己啓示がともに前提される

11 ▢ 第6節　学としての神学

1. 神学は〝学〟と呼ぶに値する学問？
2. アウグスティヌス：「知識」よりも「知恵」と
3. アクィナス：すべての学問の女王
4. 学として認定する判断基準が厳密に
5. 神学のジレンマ
6. ショルツの六つの基準
7. 知識についての伝統的な基準
8. 他の諸学と共通する領域
9. 神学は独自の位置を占める

12 ▢ 第7節　なぜ聖書なのか

1. なぜ、聖書を第一次資料に？
2. すべての組織・制度には明確な基礎が
3. キリスト教は組織ではなく運動
4. キリストに従う形で展開される運動
5. 創始者の概念の再解釈・再適用
6. 寸分違わない表現形式での継承ではない
7. 一般啓示は第二義的な資料として